

---

# 宙、漕ぎ渡る

miz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宙、漕ぎ渡る

### 【Nコード】

N3158W

### 【作者名】

miz

### 【あらすじ】

私、宮内里緒はどこにでもいる普通の女の子“だった”初めての“カレシ”だって出来て……当たり前前の日常を送っていた、はず。それなのに！？ 日常から非日常へと気がついたら引き摺り込まれていた私の謎解き・友情・ちよっぴりホラーなファンタジー

( 別サイトに掲載していた作品「わんこの背中に羽が生えた理由」  
完結作品を改稿中 )

日常と非日常の境界は思いがけない時に訪れる。

たぶん私は、誰もがそうであるように、毎日を当たり前のような顔をして過ごしていた。朝、目覚ましが騒ぎ始めるのと同時に、体をベッドから引き起こし、着替えて一階に降りる。キッチンからはオムレツの焼けるほのぼのとした匂いと、それから、珈琲メーカーからサーバーに落ちるアメリカン珈琲の香り。顔を洗って歯を磨いて「おはよう」の挨拶を両親と交わり、食卓に座る。

朝の時間は確か、こうやって過ぎていた。毎日、変わることなく。

そう、朝起きてから夜に寝るまで、特別なマニュアルが有る訳でも無いのに、当たり前前の様に私の時間は、未来へと確実に進んでいたのだ。

\*\*\*

今思えば、今朝は、妙に体調が悪かったような気がする。

低血圧をものともせず、私の寝起きはかなり良い部類に属されるのにも関わらず。けれど、今日はベッドから起き上がるのに苦労した。羽毛布団がその商品の売りに反して、しつとりと重かったのを、おぼろげに覚えている。

やっとの思いで布団から腕を出し、枕もとの時計を確認すると、午前七時半を優に過ぎていた。

やばい、このままじゃ遅刻してしまう。

ベッドを恋しがる体を無理やり引き起こし、頬を叩いて気合を入れる。

ちょっとした違和感を感じたのは、制服に着替えようと思った時だ。

体を見下ろすと、私はパジャマでは無いものを着て居た。

黒い色をした、この近所ではよく見かける服装だ。

どうやら間抜けな事に、制服を着たまま眠ってしまったようだった。

昨日の夜の自分を思い出そうとしても、特別変わったことは無かったように思う。

部活の帰り道、彼と手を繋いで歩いて　　ちよつと喧嘩したんだっけ？

それで、それから　　。

曖昧な記憶に首を捻り、眉を寄せる。

けれど、こちこちと刻まれる時計の音に慌てて我に返って、着っぱなしで寝てしまった制服が皺になっていないかを、鏡の前で一通りチェックを済ませると、階段を駆け下りた。

「おかあさーん！今日は、朝御飯いらない！遅刻しそうなの！って言うか起こしてよー！」

キッチンを覗いて、一応、母親に声をかけたのだけど不思議な事に、彼女の姿はそこに無かった。それどころか、家の中はシンとしていて、まるで生活音が無い。珈琲の匂いもオムレツの焼ける匂いも今日はしない。

「一日の基本は朝食から始まるのよ！」が持論の筈なのに。変なの。

私は、朝起きた瞬間には既にお腹が空いていると言う、完全な健康体。けれど、どういうわけか今日は何かを口にしたいと思わなかった。つまりお腹が空いていなかったのだ。食卓テーブルの上に置かれてあったバナナに、一瞬だけ目をやって首を傾げる。だけどそんな些細な事を気に留めていたら、本当に遅刻してしまう。

こう見えてもこの三年間、無遅刻・無欠席・無早退で、卒業時の皆勤賞を狙っているのだ。おまけの、アンティーク風な置時計が、本命だって云うのはここだけの話。

この春から、最終学年となった私のクラスは、本館の四階の一番端に位置していた。

裏門横のバス停に、通勤ラッシュのバスから押し出されるように降りたのが八時過ぎ。日頃は自転車通学のところ、ズルしてバスを利用した為、走らなくても充分予鈴には間に合うのだけれど、なんとなく気が急ぐ。

何故ならば、早起き自慢の昨日までの私は、誰よりも早く教室に着いて、その扉の鍵を開けていたから。

別に、鍵当番の任務を与えられていた訳では無い。

これは単なる習慣で、自己満足みたいなもの。

誰も居ない教室。

カーテンから教室に忍び込む、朝の太陽の淡い光。  
床に薄く描かれた、椅子や机の影。

前日の最終下校時刻以降、守衛によって施錠された教室の扉を開く瞬間は、例えようも無い気分だ。朝の空気を独り占めするのは、はつきり言って悪くない。しんしんとした空気に暫くの間、自分の席に座ってぼんやりとしていると、この教室にいつも二番目に姿を現す彼がやって来る。そして私達は揃ってテニス部の朝練に向かうのだ。

あれ、すっかり失念していたけど、今日は朝練もサボった事になるのか。

外壁沿いを正門まで走り、週番が立つ校門を駆け抜けて、何故か上履きの無かった昇降口をそのまま突破し、階段を駆け登りながら、体に違和感を覚える。これは本気で風邪でも引いたのかもしれない。そんな事を頭の隅の方で考えながら、それぞれの教室を目指す制服の群れをかき分けて、最上階を目指す。

いつもだったら教室までの距離なんて気にした事など無かったのに、クラスメイト達が口を揃えて言うように、こりや遠いわ。と思わず独り言を漏らしてしまった。

「おっはよー、ねえ、うちのクラスやっぱり遠いわー！寝坊してみて、初めて判ったよ。皆がぶーぶー文句言ってたの」

ガラリと扉を開いた瞬間に、予鈴が鳴る。

数学教師を務める私達のクラス担任は、律儀な事に、本鈴が鳴る

前に教室へとやって来る。

けれど、担任がやって来るまでの時間も無駄にする事無く、教室の中は朝の挨拶を交わす、大きささまざまなグループに判っていて、いつも通りの騒がしい光景が広がっていた。

いつも通り　の筈なのに。誰とも目が合わない。

突如、つきんと痛んだ頭に、嫌な予感が刹那、私の脳を掠めた。

「おはよう」

自分の席に向かう途中で、輪になって何かを囁き合っている友達の背中に声を掛けてみるけれど、私の声は届いていないようで。

嫌な予感、確信に変わりそうだ。

いや、声が小さかったのかもしれないと

「お・は・よ・う!」

今度は腹式呼吸で叫んでみる。

案の定と云うか、誰も振り向かない。絶対に聞こえている筈なのに。

まるで私の存在その物がそこに無いかのように、返って来る反応はひとつも無かった。

嘘みたい。

昨日まで確かに普通の毎日を送っていたのに。

特筆すべき点がありません、平々凡々な日々だったけれど。

ずきずきと痛み始めたこめかみを人差し指でぐつと押し、私は自分の席へと向かう。教卓のまん前の席じゃなくて良かったと思う。その席に、体を縮こませるように、俯いて座っている自分を想像して、身震いした。

窓側の列の一番後ろ。特等席と呼ばれている場所。そこは、私の席だった……等。

「だれ、こんな物置いたの」

声が震える。

涙を零さなかった自分を褒めてやりたい。

私は自分の机の上に鎮座している物体を指差した。

白い花瓶に、パステルカラーの花。スプレーマムと呼ばれる、西洋菊が綺麗にアレンジされて飾られている。しかし、西洋菊とは云え、菊は菊。教室の、しかも誰かの机の上に飾るには、あまり相応しくないのではないだろうか。

「誰がやったの！」

教室をぐるりと見渡して、声を大にして叫ぶと、隅の方で集まっていた何人かの子がひそひそと何事か囁いて、私の方を複雑そうな顔をして見る。あまり友好的では無いその様子に、私は自分の机の前に突っ立ったまま、大きく息を吐いた。



「本当のこと、なんだ……」

私の所属する三年一組は、学校一と云っても大袈裟では無いくらい、仲睦まじいクラスでは無かっただろうか？ 男女の壁も無いし、クラス内にはこれといったグループも無い。休み時間ごとに「一緒にトイレいこうよ」なんて、ベタベタした付き合いをするような子も居なかった。

それなのに。どうして、こんな事が起こるのだろう。  
思い返しても特に理由が思い浮かばない。

花瓶に生けられたパステルカラーの花の向うで、私が初めてのキスをした彼 結城 權 は、この教室の中で現在進行形にして起こっている異変に、まるで無関心な顔で、窓の向こうを見ていた。風に撫でられ少し揺れる彼の黒い髪を睨みつけて、踵を返す。

あんたも参加しているの。それとも昨日の喧嘩の延長？

涙はと云うと、やはり零れなかった。

突然すぎる平和な日常の暗転に、心がついていけなかったからかもしれない。

開けっ放しになっていた、教室の後ろの扉から出るのと入れ違いに、担任が憂鬱そうな顔をして、前の扉から教室へと入った。本鈴前の教室から一人の生徒が出て行く姿を認めただけなのに、彼は、咎めなかった。

教室を飛び出して、纏れそうになる足を必死で動かす。  
一刻も早く、あの場所から離れたかった。

日頃、授業をサボったことなど無かったから、私は一体どこで時間を潰しているものやらと悩みつつも、こういう時に辿り着くのはお決まりの場所。私の中学生生活は、別に真面目、一辺倒だった訳では無い。それなりに馬鹿騒ぎはしてきたと思う。しかし今まで、授業をサボろうと思ったことは一度も無かったのだ。

授業中に回ってくる手紙や、内緒話。気を抜けば睡魔に襲われそうになる歴史の時間だって、それなりに楽しみ方がある。こんな事云々と先生達に怒られそうだけど。私はこの学校が好きで、自分のクラスが大好きで、友達が大好きだったのは事実だ。

過去形になっちゃったのかな……。

これは何かの夢なのだといい聞かせ、静まり返る廊下をペタペタと歩き、結局、保健室へと向かう。中学生が堂々とサボる事が出来る場所は、日中の校内にそれ程多く確保されていなかった。

夢の中で寝てしまえば、次に目が覚めた時は、自分のベッドの中かもしれない。そう考えながら、乱暴に扉を開け放った直後、私はまたおかしい感覚に囚われる。目に見えない壁を通り抜けてしまったような錯覚。鼻を掠める筈の刺激臭が、しない。あの匂いは余り好きでは無いから、良かったと云えば良かった。

保健室に養護教諭の姿は無く、一応、利用記録カードに名前を記入しようとして、止めた。昨日から一週間も進んでいる未来の日付が、そのリストの一番上に書かれてあったからだ。首を傾げつつ前のページを捲ろうとすると、視界の端で影が動くのが見えた。

「え……宮内」

「滝君じゃん」

クラスメイトの一人。結城の親友でもある綺麗な男の子が、開かれたカーテンの向こう側で、切れ長の目を珍しくも丸くさせて、私を見ていた。

「なに、滝君まで……イジメの輪に加わっているとか？」

「宮内……なんだよね？」

私達は同じ瞬間に口を開いた。

「は？」

「夢 じゃ……ないんだよね」

噛みあわない会話に、私の方は首を捻るばかりだ。

「キミの名前は宮内里緒で……」

「ミヤウチリオですけど……ねえ大丈夫？ っていうか華奢なわりに、健康優良児の滝君がここに居るって事は、仮病じゃなくて、やっぱり風邪か何か？」

私の言葉に、暫くの間呆けた様に口を開けていた滝君が、やがて小さく笑った。

「その辛辣な物言いは、間違いなく宮内だ」

「ちよつと何失礼な事、言っているのよ」

「いや、思い出した」

「あら、その年で認知症ですか、そうですか」

むくれる私を余所に、滝君はクスクスと低い笑いを漏らし、自分の隣の空いているスペースをぼんぼんと叩く。

「座れる？」

「なんかその言い方、私を馬鹿にしているみたいに聞こえる……やっぱり滝君もイジメに参加しているんだ……」

「そんなんじゃないってば。それよりイジメって何なの？」

熱心そうな顔付きで腕を組み、私を覗き込む彼を警戒した訳では無いけれど、私は少し滝君から離れるようにして、ベッドに腰を下ろす。白いシーツの感触が不思議と遠い。さつきまではあれほどのベッドを欲していたのに、座った瞬間、そんな気持ち冷めていく。

上履きが下駄箱に無かった事や、教室での皆の反応。机上に置かれた菊が生けられている花瓶。

一連の出来事を、最後まで話しきると、滝君は少しだけ困った顔をした。

「お葬式ごっこなんて、今更流行らないってば」

「うーん、そういう訳じゃ無いと思うよ。だいたい權が何も言わないわけ無いだろ？ 仮にも宮内と付き合っているわけだし。しかも、君たちは至上稀に見るベツタベタ且つアツママアマな馬鹿ツプル」

「褒められているんだか貶されているんだか……しかも滝君の言葉から、解決の糸口が全く掴めないよ。……私たち昨日喧嘩したし……」

……

がつくり肩を落とす私に　だから、宮内はまだ気がついていない事があるんだよ。と、滝君はほんの少しだけ寂しそうに笑う。

「何それ」

「知りたい？」

「そう言われると、知りたくても、知りたくないような気分になつてくるじゃない」

「まあそう言わずに。どちらかと云うと早く気がついた方が良いでしょうな気もするから」

「ふーん……なんか怪しいなあ」

口を尖らせて滝君を見る私に、彼はきゅっと口角をあげ、綺麗な形の笑みを作り上げる。

「大丈夫、この名探偵にお任せ下されば、すつきり解決間違い無し」

かなり胡散臭そうな台詞に、けれどとても自信がありそうな口調に、渋々ながら頷いた私は、口説かれた事になるのだろうか。結果として、先ほど駆け下りた階段を、今はゆっくりゆっくり上がっている。

二時間目が終わった教室は、相変わらず余所余所しかった。

私は滝君の後ろから伺うように、扉の外から室内を覗きこむ。大丈夫だよ。と彼は、自分に着いて来るように私を促した。一人にされるのは堪ったものじゃない。四面楚歌のこの状況に、滝君以外に頼れる人間は居ないのだ。私は仕方なしに、俯きながら彼の後ろに張り付くように、教室の後方を横切る。面白いくらい誰も、私を見ない。悲しいを通り越して、腹が立ってくる。

一体、私が何をしたというのだろう。思考の出口は見つかるところか、どんどんと泥濘の底に沈み込んで行くようだった。

結城は、窓の外を見ていた。机の上には恐らく前の時間に使用されていた国語の教科書の『徒然草』の第二百四十三段のページが、そのままに開かれている。滝君は私の席を一瞥し、それからそこを通り過ぎて、結城の机をトン。と叩く。その微かな振動に、結城の頭がこちらを振り返って、親友を目にし、目を細める。

「サボリ魔」

「たまには良いんだ」

男の子二人は、何が可笑しいのかひとしきり小突きあつ。

「次は出るのかよ」

「いや、今日はちよつと体調悪いらしいから」

滝君は結城の問いに肩を竦める。

「悪いらしいから。って何だよ、他人事みたいな台詞」

「他人事。ね」

ぼつりと結城の言葉を繰り返すように呟いた滝君が、チラリと私の机の上を見る。

結城の目が瞬いた。

「ねえ、權。どうして君は何も無かったような顔しているの。まるで最初っから 彼女がこの席に居なかったみたいに」

突然の滝君の言葉に、彼は人形のように表情を失った。教室中の注目がこちらに集まる。

私は酷く居心地が悪くなって、縋るように滝君に一步近付いた。

「そういう顔をしてさ、彼女が喜ぶと思っているの？」

私が隣に居るにも関わらず、滝君までもが『彼女』と云う三人称を使って、まるで私がここに居ないかのように、言う。

「も、いいよ。滝君」

思わず私は滝君に声をかける。

結城は私の言葉が癪に障ったのか、眉根を寄せる。

「 忘れた、わけじゃない」

それから、とても苦しそうな声を喉から絞り出して、自分を守るように腕を体の前で交差させると、窓に寄りかかった。

「 でもお前がそう言っても、……里緒がもうどこにも居ないのは、 事実だから」

その苦しげな声に、かちり、と不快な音を頭の中に響かせながら、ピースがはまる音がする。

私がまだ、気がついて居ない事。

「 ちよっと、待って」

私は、滝君の制服の袖を掴もうとして 出来なかった。

指先にあつた、と思っていた触角は無い。私の体は、急速に色を失い、半透明になり、そしてあらゆる感覚を失って行く。

「 もうちよっと、待って」

たぶん、私は理解しかけている。何が、起こっているのか。

否、起こったのか。

「 今、言わないで」

結城から視線を外し、そしてその透き通るような目で、滝君が私を捕らえる。

「 私、たぶん判った」

そう答える私の声はきつと、結城には届いていないのだろう。

「 判ったから、今は言わないで……」

彼の視線は私を通り越して、滝君へと向けられ、その直後に私の机の上に置かれているパステルカラーの花を捕らえる。直後、結城はそれを乱暴に掴んだ。花瓶が砕け落ち、破片が飛ぶ。

陰鬱な悲しみが、広がり、空間を支配していく。  
静まり返った教室に、誰かの啜り泣きが落ちた。



滝君の言っていた、私がまだ気がついていない事。

その答えは、案外早く見つかった。見つかつてしまった。

すつきり解決。では無かったけれど、まあ、納得した。

私もそこまで馬鹿では無い。そういった類の怪しげな雑誌だつて読んだ事があるし、去年の林間学校の時には、そう云ういかがわしい話を、懐中電灯の明かりの中でぎゃあぎゃあ喚きながら、友達と興味半分、恐怖半分にした事がある。

えーっと、つまり

「いまの私は……幽霊つて事なんだよね？」

妙な確信と共に、呟かれた言葉が疑問系なのは、仕方が無いと思う。

「つまり何もなくて、そう云う事になるね」

「うわ、本当に最悪」

全くと言って良いほど自覚が無い。記憶をすみずみまでせつせと掘り起こしても、いつ自分が死んだのか思い出せない。頭の中に浮かぶのは、豆柴のハニイが死んだ時に、頭が痛むほど泣いた、小学生の私の姿ぐらいだった。自分に近い人間が死んだ記憶は、今の私の記憶が正常なものならば、一度も無い。というか、死んだのは私自身か。

自分が死んだのを覚えている人間なんているかー！ と、ここに卓袱台があったら引っくり返したい気分だった。

「じゃ、滝君は見える人なんだ……そういうの」

「寺の息子だから、そういうのには縁が無いと思っただけだねえ。案外、僕の思いの強さがそうさせていたりして。まあ、これが幻覚だったら困るなあ。はつきり見えすぎるし」

「困るなあ。じゃないよ！ 私、ちゃんとここに居るもん」

……半透明だけどさ。

と、戯れにぶんつと腕を振ってみると、案の定、私の腕は滝君の顔を真横から突き抜けた。

「ぎゃー！」

「宮内が驚いてどうするの？」

「だ、だって、腕が……す、するって」

「そりゃ当たり前だよ。だって君は」

「い、言わないでよー」

真顔で嫌な台詞を続けようとする滝君に、思わず涙目になる。当然、涙は出てこないのだからうけど、これは気分の問題だ。

私は、死んでしまったらしい。

いつ？

どうして？

丁度その部分の記憶は欠落してしまっていて、どんな事が私の身の上で起こったのかは、堂々と聞きかじった周りの人間の会話から、

想像するに留まっていた。

リビングの隅に飾られている自分の写真を、見つめ返しながら考える。あの写真は、この前のお正月に晴れ着を着て初詣に行った帰り、街の写真館で撮影した物。緋色に大胆な桜の模様があしらわれた着物は、和裁の先生をしている祖母が縫ってくれた。従姉妹のお姉ちゃんの結婚式の時にしか、まだ活躍の機会を見せていなくて、母が「今年はあれ来て行こうか？」なんて桐ダンスから出してきてくれた時は、相当、嬉しかった。

その影響からか、幸せそうに笑っている私の顔は、自分で言うのもなんだけど、割と可愛く写っている方だと思う。大きく引き伸ばされ立派な額におさめられた写真の横には、テニスウェアを身に纏って、勇ましい表情をしている、試合中の私の姿が小判サイズの写真に写っている。都大会の準決勝で敗退した直後に、テニス部のレギュラー全員で撮った集合写真もどこかにある筈。久しぶりに見たいなあ、と思っても、この不自由な体は、「死んでいる事」を自覚してから、上手に物を持つことが出来ない。私の部屋を毎日掃除している母が、床に散乱している写真を見たら、きつと驚いてしまうから諦めた。

それでなくても、家の中は陰鬱で、彼女がそんな現場を目にしたら、いよいよ発狂してしまうだろう。

「里緒ちゃん」

話しかけられたのかと、思った。憔悴しきった母親が、私の大好物だったロイヤルミルクティの甘い香りがたつマグカップを手にして、すぐ隣に座る。彼女はまっすぐと写真を見つめ、それから長い長い溜息を吐いた。

私は隣に居るのに。お母さんにも見えないのかあ。

丸められた背中はとても小さく見えた。

大丈夫だよと、その背中を撫でたかった。

死んでしまったけど、今も元気にこの辺をうろろろしています。って伝えたかった。

思い切って腕を伸ばしてみる。

けれど予想通りと云うか、私は母親の体をすり抜けて、自分の遺影が飾られている仏壇に、ふよふよと移動しただけだった。

よっぽど意識を集中させていないと、扉も壁もすり抜けてしまう不可思議な体質に、最初は恐怖さえ感じていたけれど、人間とは慣れる生き物なのだ。

今日も私は、当たり前のように、壁をすり抜け、床をすり抜け、黒板をすり抜け、四階の窓の外付近を浮遊して、授業中の教室の中を覗き込んで、結城や滝君を初めとした友達の様子を伺う。トイレの花子さんよろしく、旧校舎の二階の女子トイレに籠もってみたものの、小一時間と持たずに断念。深夜の音楽室や理科の実験室には、たとえ自分が幽霊の身であったと理解していても、恐怖の方が勝って突入は諦めた。

何度数えても、私が頻繁に利用していた西階段の段差が、一段増える事も無かったし。幽霊らしい事をしてみようと挑戦したすべての事柄を、完遂させた事など無かった。学園に七不思議など無いという事が判明したくらいである。

お、これって世紀の大発見じゃない？

『学園に七不思議は無い』

都市伝説として広めてみたいくらいだ。

たぶん今の私は生きていた時と、あまり変わらない。

ただお腹が減ったりしないだけで、毎日学校に通って来ている。

こんな生活って、有りなのだろうか？

テニスコートのネットのど真ん中に立ってみたときは、はっきりいってもう、脈を打っていない心臓が、止まるかと思った。ストーリーキングするには便利な体だけど、恐怖を感じるのは、生きて居る時と全く同じで、幽霊生活が面白かったのは最初の何日かだけだった。

なぜなら、私の姿を見ることが出来るのは、滝君だけだから。

そうなのだ。

学校と云う多くの人間が集まる場所にも関わらず、そういう特殊な体質を持っている人には、まだ彼以外お目に掛かっていない。もしかしたら、違う学年にそういう特技を持った人が居るのかもしれないけど、私の事を知らなかったら、特別何も思わず、あたり前のように前を通り過ぎてしまふに違いない。

ともかく、クラスの子も、他のクラスの友達も、テニス部のメンバーも、先生達も、滝君以外には私の事が見えないのだ。

彼氏だった結城でさえも。

誰にも見えないのをいい事に、あたしは毎日猫のように、あっち

に行ったりこつちに行ったりと、かつての行動範囲だった場所をふらふらと彷徨い、飽きては、帰宅部の滝君をとっ捕まえると、その日一日あった出来事、見た出来事、耳にした噂などを報告するのが日課となっていた。

「ところで、私は疑問に思っているんだけどね」

密会の現場は、大抵が、屋上に設置されてある給水塔の天辺だった。人口密度の高い所で幽霊の私と会話している滝君は、傍から見ると、頭がちよつとおかしな人だと思われてしまつだろつと云つ懸念からだ。正座の体制で滝君を出迎えた私に、彼は器用だなあ。と感心する。

これくらい気合を入れればなんとかなるものよ。

記憶の無い最初の一週間を除外しても、幽霊歴はそろそろ三週間になるのだ。

自慢出来そうも無い事を考えながらも、胸を張った。

「で、疑問つて？」

「いや、私は、成仏するのかな……と思つて。一向にそついつ気配が無いし」

「うーん、たぶんする……と思つよ」

「それは、一体いつ？」

「エキスパートじゃないから何とも言えないけれど。それに だいたい親父が坊主やつている浄土真宗には、霊魂そのものの概念が無いから、これはあくまでも想像の話し」

……四十九日が過ぎたら自然とそついつ所に行くんじゃない？

彼は、のんびり答える。

「ふーん……という事は、タイムリミットは残り三週間くらいなのかな」

うんうん指を折って唸る私に、滝君は少しだけ寂しげな顔をした。

「あ、別にね……さっさと成仏したいとかって訳じゃないのよ。たぶんなんだけど……思いを残しているから私は幽霊になっているんでしょう？」

「まあ、そうかな？　これが僕の幻覚じゃなければね」

「まだ言うかー！」

冗談だつて。と彼は相好を崩した。

「でもね私、この幽霊ライフを自分でも意外な位満喫しちゃっているし、もし成仏する日を逃したら……あ、悪霊とかになったりしちゃわないかなーって、思ったのよ」

「あ……」

「で、結城や滝君がどんどん成長して行くのを、この姿のままで見守るのかな。と思うとね、少し複雑になって。だって絶対この先、結城だつて私以外の女の子と恋をするだろうし、そういう現場を見かけたら……呪っちゃうかもしれない」

我ながら恐ろしい考えだとは思ふ。今はまだ、悲しみの最中に居る結城は、作り笑いを浮かべているものの、時折溜息を落としたりして、茫洋とした視線で空を眺めている。たぶん私の事を想っているのだろうな、と嬉しくもなる。

けれど、彼の視線の先辺りに、浮かんでいる私の姿は、彼には見えていないのだ。

極論かもしれないけど、見えない人は、いつか、忘れられてしまふ。

結城は『忘れたわけじゃない』と言ったけれど、その日はいつかきつとやって来る。

そのいつかがやって来てしまった時、私がまだこの世界を……結城の周りをふらふら彷徨っていたら、そういう問題が起こるかもしれない。

かもしれない、の話しだし、人を呪う方法なんて知らないけれど。

でも、それだけでなくも現在の私は、かなり特殊な体をしている。

思うように物を動かしたりはまだ上手に出来ないけど、一生懸命念じると、小さなものなら多少は動かせるようになってる。日々此れ鍛練。

そういえば、先生ごめんなさい。理科室のビーカーを床に落として割ったのは私なのです。

「だから、私は絶対に成仏しないといけないと思うの。その為には滝君の協力が必要。お願い力を貸して！ だって自称だけど名探偵だって言ったのは滝君なんだからね！ 依頼者を助けるのは探偵の仕事じゃない。その位、小学生でも知っているんだから」

一息に言い切った私に、滝君は目を瞬かせてから

「本格的に探偵事務所開業するかな」

と、面白そうに答えた。



成仏する為に、しなければいけない事。

上手に鉛筆を握れない私の代わりに、滝君が丁寧な文字でノートに書きつける。私は滝君の部屋の文机の上を浮かびながら、生憎の曇り空で、月影も星影も見えない暗い空を眺め、考え込む。

「残している想いは何か？ を探り、すつきり解決させるとか？」

「それは權に関する事だよな？」

「だと、思うんだけどー。まあ、それ以外にもあるかもよ」

「だったら宮内自身の問題になるんじゃないかな」

「冷たいよ、滝君」

だつてさ。と彼は少々眠そうに答える。何故なら、現在時刻は草木も眠る丑三つ時。睡眠欲を失った私が眠くなる事は無いのだけど、一般中学生には苦行になるか。

「あ、あと死んだ瞬間を思い出したい。どうやら結城と一緒に居たらしいんだけど、その現場からどうやって私が信号を無視して横断歩道に飛び出したのか」

「それは、結城に聞くしかないなあ」

「じゃ、滝君の任務ね」

「りょうかい」

「あとねー、」

「……ごめん宮内。もう、限界ぽい。眠い」

その言葉を最後に、滝君はノートを枕にして、その場につつ伏し

たかと思うと、たちまちのうちに寢息を立て始める。

裏切り者めー。

安らかに眠る横顔に、怨みを吐き出すと、滝君の眉が僅かに寄せられた。その直後、苦しそうに唇が歪められ、指がぐっと握り締められる。どんどん青白くなっていく頬に、私は思わず手を伸ばす。けれど彼の腕はそれを振り払うように顔の辺りを掠め、私は驚いて後ろに飛び退った。

離れた所から様子を伺っていると、次第に彼は落ち着きを取り戻したように、くうくうと寢息を立て始める。私は、呆然と、今起こった出来事に思いをはせる。意識して、やった訳では決して無い。けれど、今の『裏切り者めー』と云う思いが、眠っている滝君に何かの影響をおよぼしたように見えた。

「ごめん」

眠る彼に手をあわせて謝り、私はふらふらと窓から外に出た。

心許無い街灯を道標に、自宅へと向かう。今日もあの家は、悲しみに包まれているのだろう。それを考えると家に帰るのも憂鬱になる。結城の寝顔でも見に行こうかな。ぼんやりと考えながら、道の角を曲がった瞬間、目が合った猫に、毛を逆立てられ威嚇された。

お返しとばかりに、舌を出すと、ぎゃっと呻き声をあげて、通りの向こう側に逃げて行く。

「なんだかなあ」

別に、悪い事をしたいわけじゃないのに。本当に、呪い体質になっちゃったのかもしれない。

そんな事を思うと、堪らなく悲しくなってきた。  
友達を苦しめたい訳では無いのに。通りすがりの猫を苛めたい訳  
じゃないのに。

陰鬱な思いを抱えたまま、結局私は結城の家へと向った。

滝君の家と結城の家は、歩いて十分くらい。今の私の体なら瞬く  
間に移動できる。

カーテンの引かれた窓の向こうは暗い。

そのまま室内へと体を滑り込ませると、結城は薄闇の中でベッド  
に横たわりながら両手を胸の辺りで組んで、目を開いていた。私は  
彼の体の上に座って、じっとその顔を覗きこむ。けれど、結城は時  
折瞬きをするくらいで、ぴくりとも動かなかった。何の色も無かつ  
た。当然、私の姿が結城の瞳の中に映りこむことも。

「起きているなら、私と話をしてくれないかなあ」

そう呟いた刹那、結城が眦を厳しくさせた。いつも口喧嘩する時  
のような、怒りや呆れでは無く、とても重たい懊悩を秘めた色を、  
瞳に浮かばせる。そして息苦しいのか口を僅かに開いて、浅く呼吸  
をする。自分の体を縛り付けている目に見えない鎖を解き放とうと  
指先や睫を振るわせる。先ほど、滝君が見せたように、次第に結城  
の顔が青褪めていく。

「え！ ちょっと大丈夫？」

思わず結城に顔を近づけると、彼は瞬間的に顔を背けた。

結城の反応に心奥を締め付けられたような感覚になる。

今度は私が青くなる番だった。

もしかして、私がそうさせているの。

恋人を心配する事さえ、赦されないというのか。

突きつけられた事実に自失し、ふらふらと私は結城の体から離れる。すると途端に結城はガバッと跳ね起きて、大きな呼吸を繰り返した。額には汗を掻いている。

「嘘でしょう……」

声が聞こえるわけでも無いのに、口元を押さえて、ずるずると後ろに下がる。私の身体は壁をそのまま通り抜け、空に漂った。月灯が、アスファルトに私の影を落とす事は無い。隣の家が、犬小屋から飛び出してきて、わんわんと吼えだす。

途方に暮れた私は、明け方にはまだもう少しだけ遠い、公園へ。霊体となったこの身を、誰に見咎められる訳でも無いと云うのに、あまり、人が居なそうな場所を選んでしまつのは、日陰の身だとしても自覚しているからだろうか。

「そのの」

なんて落ち込んでいたら、声を掛けられた。驚いて顔をあげると、どうやら同業者らしき老人が目の前に立っている。半透明の体の向こう側に街灯がやや霞んで見える。恐怖は無かった。穏やかそうな雰囲気のある杖をついた老人だ。

「新入りか？ この辺では珍しいのう」

老人は嬉しそうに顎鬚を撫で付けると、私の隣によっこいしょ。と掛け声をかけて座った。

「ワシは、四丁目の田辺ん家の守護霊よ。お譲ちゃんは、どこの娘さんかね。こんな若いのに感心感心」

「えーと私は一丁目の宮内です。宮内里緒」

「おや　一丁目の宮内と云ったら、えー、この前亡くなった娘さんかね？　その交差点で起きた交通事故で、即死だったとか云う」

幽霊業界にも、回覧板や自治会があるのだろうか？

私の疑問に老人は新聞で読んだのだと答えた。

「その宮内ですけどー……」

「こりゃ困ったわい。まだ四十九日も過ぎてないじゃろ」

胡乱に隣を見上げた私に、田辺老人はぽりぽりと頬を掻く。

「成仏前の御仁に会ったのは、初めてでこのう」

「そうなんですか？　もしかして、私って新種なのかな……」

そういえば、私が死んで一ヶ月以上経ってしまったけど、自分以外の幽霊を見たのは初めてだった。

「新種とは、おかしな事をいう娘さんじゃなあ」

かか、と老人は笑う。しかしすぐ笑みを消して、真面目な顔付きになった。

「早く成仏せいよ。わしゃあんたが守護霊なのかと思ったからの。　うんうん、確かに守護霊になるには、ちと若すぎるか」

はっきり言って、田辺老人の言葉は理解不能。私はきよとんと半透明の目を見つめ返す。

「えーっと……おじいさんは成仏したんですか？　成仏したのにこの辺に居るの？　あ、だから守護霊なのか……」

「ほう、頭の回転が速い。流石、若い人は違うわい。脳みそもびち

「びちで羨ましい限りじゃ」

「はあ」

「霊体には、いくつ種類があつてな。死んで直ぐ成仏してあの世に行つてしまう者。死んで直ぐ成仏できず、この世を彷徨う者。ワシの場合は死んで直ぐ成仏してあの世に行つたんじゃないよ。ただの老衰じゃったし、ばあさんも一足先に行つておつたしな。思い残すものがひとつも無かつたと云うと嘘になるが、それでも幸せに死んだのよ」

そう言つて、懐かしそうに目を細める。

「あの世ではあさんと久しぶりに逢瀬を楽しんだ後、ちと地上に降りてみた。最期の五年間は病院のベッドで寝たきりの生活を送つておつたから、自由に歩き回りたいと云う気持ちが、ちいとはあつたのかもしれない」

「……成仏してあの世に行つて、また簡単にこっちに来られるものなんですか？」

「いいや。こっちに来る為には、役職につかにゃいかん」

「つまり、それが守護霊？ 守護霊つて職業だったのかあ……」

考えてみれば死後の世界について、はじめてレクチャーを受けている事になる。守護霊なんて仕事があるんだつたら、彷徨える魂を導いてくれる係りとかも作ればいいのに。ほら、私みたいにどうやって成仏すればいいのか判らなくって悩んでいる子だって居るんだからぞ。

「ふむ、そりゃ正論じゃな」

「もしくは、おじいさんみたいな守護霊さんが、私みたいな迷子を見たら教えてあげるとか。あの世が本当に存在しているって云うの

も、今初めて知ったくらいですもん」

「そうよの。しかし守護霊は大抵が個人に憑く、もしくは家に憑く。今日みたいに一人で出歩く日は限りなく少なくての。その家に、その人に、その家族に張り付いて守らにゃいかん。行ける範囲というのも当然狭められる」

「あ……ここは四丁目だから」

そう。と老人は半透明な杖を握りなおす。

「でも、その守護している人にくっついて歩いて居たら、意外と他の人にも会いそうだと思うんですけど」

うんうん。と頷きながら、彼は言う。

「守護霊家業は、意外と大変な仕事での。年中無休な上に、当然無給。最初のうちは、警備員さながらに、悪い気と戦うのに、そりゃあ必死だったものよ」

けどなあ。人間は強い。案外と強い生き物でなあ。田辺老人は、愛しそうな視線を明かりの消えた家の窓辺にやる。

「見ているだけのこっちはやきもきして何とも、落ち着かないんじやが、あらゆる事に助けの手を差し伸べてしまったら、その個人が本来自分で解決出来るであろう事の、邪魔をする事になってしまう。だから、成仏した後には守護霊になる道を選んだ者達も、ある程度の期間、守護者の世話を焼いた後、結局はあの世に帰って、この世を見守りながら、次の魂の再生を待つ長い休暇に入るのよ」

思いがけない守護霊業の職務説明とあの世の世界観に、懸命に田辺老人の言葉を追って、話しについていこうと努力する。

「えーっと、つまり、結構な確立で守護霊の皆さん達が、廃業

しちゃうから、この世に居る幽霊の数はそんなに多く無いって事でしょうか？ だから、幽霊同士が街中でばったり出会う事も殆ど無いんですか」

「そうじゃ。……最近、三丁目の田中のばあさんが、守護霊業を廃業にしてあの世に帰ったのを最後に、この辺りの幽霊は、奇特にも守護霊業に就いて五十年目になるワシ一人となってるな」

と、公園の隅にじっと視線を遣る。

「今日は、その悪しき気が妙に騒いでおったから、ちと様子を見にきたら、娘さんに偶然会ったのじゃ。ほとんど傍観しているとは云え、一応、田辺の家の守護霊じゃからなあ」

少しは、働かんと。

と、言いながら、彼の目は濃い影が落とされた一角を見つめた。

「何か、居るんですか？」

「あいつ等は」

悪さしよる。と杖をトンと地面に突き立てた。

途端にそれに反論するかのように、影から黒灰色の霧が飛び出して地面を這いずり回る。

「な、何ですかアレ！」

「アレは、悪霊じゃよ」

想いが強すぎて、成仏できなかつたんじゃろうに。と老人の唇が動く。

その言葉に背筋が凍りつくように、私は固まった。



「成仏できないと、みんな……ああなっちゃんですか？」

「この世に残した想いが強すぎる魂は、成仏する事を拒む。天からの招きを拒む。それを拒んだ魂は、第三者……つまりワシのような守護霊の力を借りて、強制的にあの世に送ってもらうか、自我を失って永遠にこの世を彷徨うか。つまり悪霊に変化するのよ。また悪霊は彷徨える魂を好んで喰らっては、己の体に取り込もうとするんじゃない」

私は呆然と、老人の言葉を聞いていた。

ほんの少し怨み事を思っただけで、滝君は酷く苦しそうな様子になった。私の呟きに、結城は顔を背けた。

それはもしかして私が、悪霊になりつつあるからでは無いだろうか。

「やだ……そんなの嫌だよ。このまま成仏出来なかったら、結城を苦しめる事になっちゃんかも……しれない」

感覚は無いのに、目からは久しぶりに涙が零れた。

ぼたぼたと、着たきりすずめの制服のスカートに、染みが浮かんで消えて行く。

「何か、この世に強い想いを残しとるのかのう、娘さんは」

田辺老人の大きな掌が、私の頭をゆっくりと撫でる。

私はそれが何か、判らないのだ。私の残した強い想いが何なのか。死んでから初めて、わんわん泣いた。

「早く娘さんが成仏できるよう、願っておるよ」

遠くで猫が唸り声をあげる。

地面這う黒灰色の霧がそれに呼応するようじじそりと、蠢いたよ  
うな気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3158w/>

---

宙、漕ぎ渡る

2011年10月9日15時44分発行